Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-20

他者の痛みと想像力ー津波・震災・アスベスト

本林, 良章

(Citation)
住民参加による被災地のアスベスト飛散調査への参加・協力 : 調査報告書:63-69

(Issue Date)
2013-03

(Resource Type)
research report

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009571

本林良章　　「他者の痛みと想像力—津波・震災・アスベスト」

初めに

「石巻市 : 被災地における瓦礫とアスベスト飛散状況の調査」に関する報告を以下に記す。

報告者は、痛み pain という問題に関して強い学問的な関心を有している。それゆえ、本報告は、アスベストや津波といった問題を含む震災の痛みに焦点を当てたい。特に、痛みを想像するということはいかなることなのか、この点について考察を進める。「想う」という働きに着眼する理由に関しては、後述するが、今回の調査経験が大きく関係している。

今回の調査では、被災地の瓦礫の問題やアスベスト飛散状況に主眼が置かれており、それゆえ被災者への聞き取り調査などを行ったわけではない。しかし、それでも調査参加者は皆、被災された方の痛みに触れていた。

記録と想像——吉村昭『三陸海岸大津波』と高山文彦による解説から

津波の痛みを今回の調査のテーマとした報告者は、事前学習として、吉村昭『三陸海岸大津波』を精読した。本節では、記録と想像という点にしぼって言及する。

本書には三陸海岸を襲った明治 29 年の津波、昭和 8 年の津波、チリ地震津波に関する詳細な情報が記録されている。解説を担当した高山文彦は、本書について以下のように言及する。

> 吉村氏は徹頭徹尾「記録する」ことに徹している。だから、付け焼き刃的なフォークロアの甘いアプローチをしない。情緒的な解釈もしない。圧倒的な事実の積み重ねの背後から、それこそ津波のように立ち上がってくるのは、読む側にさまざまなことを考えさせ、想像させる喚起力である。（吉村昭 2004, p. 187。強調は本林）。

著者の吉村昭は小説家であるが、高山が指摘する通り、本書はどちらかというと「事実」の「記録」ということに主眼が置いており、「情緒的な解釈」は見られない。しかしだからこそ、本書には「読む側にさまざまなことを考えさせ、想像させる喚起力」がある、と高山は言う。このように解説にて、高山は「記録文学者としての吉村氏の根幹を、本書は十分にしめしている」（吉村昭 2004, p. 191）と述べ、記録という観点において本書がいかに優れた著書であるかを力説している。私は、高山の本書への評価に同意する。たとえば、明治 29 年の津波に関する次のような事実描写がある。「死体が、至る所にころがっていた。引きちぎられた死体、泥土の中に逆さまに上半身を没し両足を突き出している死体、破壊された家屋の材木や岩石に押しつぶされた死体、そして、波打ち際には、腹をさらけ出した大魚の群れのように裸身となった死体が一列になって横たわっていた」（吉村昭 2004, p. 30）。吉村によるこうした描写は、たとえば津波の惨状を映し出した写真や映像よりも、時として、圧倒的なリアリティをもってわれわれの想像をかきたてるのである。本書には上

に記したような吉村自身による惨状の描写だけでなく、被災後、子供たちによって書かれた作文も収録されている。本書に採録されたこうした多くの「記録」は、われわれに津波による被害を想像させる。

以上記したように、多くの資料収集や聞き取り調査を経て記された記録は、革新的な映像技術を持つ現代においてもなお、色あせることなく、津波の惨状をわれわれに想像させるのである。

津波の跡地から想像する

今回の調査でいくつかの津波の跡地を訪ねたが、中でも被害が甚大であった大川小学校を訪れた時、調査参加者は皆、息をのみ言葉をなくしていた。調査をリードしていただいた方から、「津波はこちらの方角からあちらの方角へ流れてきた」「生徒はここに整列していた」「こちら側に逃げて行った生徒もいる」といった当時の状況を聞いたとき、胸が締め付けられる思いであった。また、日和山公園では、津波から逃れるために実際にのぼったとされている長い階段を登り、周辺の被災地を一望した。

なぜ胸が締め付けられたのか。想像していたからである。しかし、大川小学校を訪れた当初は無自覚にそれを行っており、特に自分が津波の痛みを想像していることを意識してはいなかった。このことを意識するに決定的だったのは、民宿に泊まった日の夕食中の永倉冬史（中皮腫・じん肺・アスベストセンター）氏の発言である。永倉氏はマスクプロジェクトの提案者であり、かねてより神戸大学人文学研究科・倫理創成プロジェクト関係のイベントに協力していただいている。氏は、「こういう活動をしていると想像力が豊かな人に出会える」と発言した。アスベスト等により将来起こり得る被害を想像すること、因果関係の立証を目的として過去の状況を想像すること、こうした想像力が豊かな人に活動を通じて出会えるという旨を話されたと記憶している。この時はじめて、『三陸海岸大津波』を精読していた時、大川小学校を訪れた時、日和見公園の階段を登った時、震災当時の状況を、津波が襲いかかってくる状況を、それにより担わされる痛みを想像していたことを自覚した。本報告が従来から関心を持っていた「痛み」というテーマに「想像」という観点を加えた背景には、上の永倉氏の発言がある。私はたしかに津波を、津波により受けた被災者の痛みを想像していた。

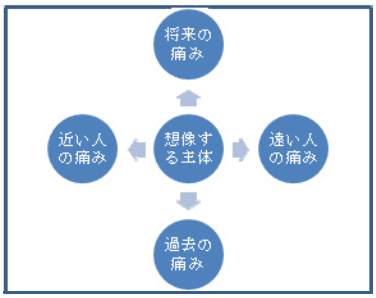
他者の痛みへの想像力

しかし、被災者の痛みを想像することはいかなる働きなのか。この働きを詳細に記述する必要がある。

まず指摘されなければならないのは、他者の痛みへの想像は、縦軸と横軸という二つの軸において考えられるということである。横軸とは、現在苦しんでいる人の痛みを想像するということである。横軸において、想像される対象は、私の目の前にいる人かもしれないし、地球の裏側にいる人かもしれない。縦軸とは、過去に苦しんでいた人の痛みを想像

することと、将来に苦しみ得る人の痛みを想像することである。以下に図示する。

図：他者の痛みと想像力



中央にある円が想像する主体である。四方に突き出た矢印が、想像する作用すなわち想像力を表す。注意すべきは、ここに示された想像力は特殊な人や状況に限られた特別な働きではないということだ。現象学の言を使うと、われわれは、多かれ少なかれ、日常的な生において、「いつもすでに」他者の痛みを想像している。しかし、日常的な生においては、横軸つまり場所的には遠い人よりも近い人のことを、縦軸つまり時間的には遠い将来や過去のことではなく比較的現在に近い時点のことを想像していることが多いことは否めない。

精神科医の宮地は、トラウマ被害に関する書にて、遠き者を想うことに関して次のように言う。「当事者からいちばん遠い人を想像すること、いちばん遠い人を悼み、愛し、つながろうとすることが、逆説的に、〈内海〉にいちばん近く深く寄り添うことになるのかもしれない」（宮地尚子 2007, p. 215）。〈内海〉は、宮地の環状島モデルにおいて、声を出せないほどの重いトラウマを抱えた当事者のいる場所とされている。こと津波やアスベストをめぐる問題においては、自分の現在時点からは時間的に離れた人の痛みを想う必要が生まれるのではないだろうか[72]。震災や津波は頻繁に日本を襲ってきたが、大規模のものに限定するとある程度のスパンがある[73]。そしてアスベスト問題に関してもその性質を考慮するに、問題解決に向けた活動において時間的に離れた地点の痛みが想定される必要があるだろう。ここで、広瀬弘忠『静かな時限爆弾――アスベスト災害』を引いて、アスベストの基本的な知識を確認しておきたい。

> アスベストという名前は、ギリシャ語の『ἄσβέστος』に由来すると言われている。この言葉の意味は、消すことのできない（英語では inextinguishable または unquenchable）ということである。アスベストは環境中で、半永久的に劣化することなく存在しつづけ

[72]言うまでもなく、こうした認識は上記の永倉氏の発言を参照元としている。

[73]時間的なスパンに関しては、東北での調査中に何方かが言及されていたことを記憶している。

る。じつは、この性質がアスベストの人体に対する毒性を強めるうえで重要な役割を果たしている。最初の曝露より二〇年から四〇年のタイム・ラグを置いて、肺がんや中皮腫を発病させる。このように長い潜時をもつことから、体内のアスベストは時限爆弾になぞらえることがある（広瀬弘忠 1985, p.9）。

アスベストは「今すぐ」という危険性がなくとも時限爆弾として数十年後に病を発生させる以上、そのリスクは決して軽視されるべきではない。この時限爆弾は数十年後に爆発する、つまり将来的に痛みを生じさせ得る。被災地では目の前の危険の除去を優先するがゆえにアスベスト対策がなおざりにされることがしばしば指摘される。将来的に起こり得る痛みを想像することは、こうしたアスベストリスクの軽視を無くすことにつながるに違いない。

以上述べてきたように、他者の痛みを想像することは日常的な生において「いつもすでに」行われていることとはいえ、アスベスト問題を考えるあるいは支援活動をする上で、上記の図の縦軸すなわち遠い過去と未来を想うことは欠かせない要素としてあるだろう。そして、想像力を実際に生かす可能性のある支援活動は、リスクコミュニケーションではないだろうか。次節で検討する。

縦軸のリスクコミュニケーション

「東日本大震災後の被災地におけるアスベストの状況――石巻アスベスト・プロジェクト報告書」（特定非営利活動法人・東京労働安全衛生センター）の「5-2. リスクコミュニケーションをすすめるために」にて、リスクコミュニケーションに関して次のように述べられている。

> 災害復興の過程では平時とは異なるリスクが生じる可能性があります。リスク管理を災害復興の一部分として位置づけ、リスク低減のために、的確な情報を伝え共有することと、意見交換の場を設けるリスクコミュニケーションを進めます。住民、ボランティア、行政、業者、NGO などが関わることができる広いリスクコミュニケーションの場をつくります。
>
> 【具体的な提案】
>
> ① 行政は災害復興の一部分としてリスク管理を位置付けます。
>
> ② 地域、ボランティア団体、学校などで、例えば防じんマスクの使い方講習などとあわせてリスク教育とリスク低減のための協議をおこなう企画を開催します。
>
> （特定非営利活動法人・東京労働安全衛生センター2012, p.17-8）

ここでは、「住民、ボランティア、行政、業者、NGO など」がリスクに関して相互に情報を伝達し合う「場」の必要性が訴えられている。そして、「行政」による「リスク管理」や、

「講習」会などがリスクコミュニケーションの具体的事例として位置づけられている。

それでは、こうしたリスクコミュニケーションを可能にする原理とは何だろうか。永倉氏の上述の発言を受け、報告者は、その原理すなわちリスクコミュニケーションの根底にありこれを可能にする原理こそ想像力であると考える。それもことアスベストや津波そして震災のリスクコミュニケーションという文脈においては、横軸の想像力すなわち現在苦しんでいる人の痛みを想う想像力のみならず、縦軸の想像力すなわち将来生じるであろう痛みを想う力こそが特に重要な意味を持つ。リスクコミュニケーションが実施される背景には、将来起こり得る痛みを想定した想いというものが根底に働いていなければならないし、働いているに違いない。また過去の痛みを踏まえた上で、それと同じ痛みが繰り返されないように未来の痛みを想定したリスクコミュニケーションがされている以上、ここでは過去の痛みというものが軽視されているわけでは決してない。

加えて、リスクコミュニケーションには、将来生じうる痛みを超えて、次世代に起こり得る痛みを想うことも求められるのではないだろうか。言い換えれば、リスクを次世代に伝えるということ、次世代へのリスクコミュニケーションということも考えられなければならないのではないだろうか。神戸大学人文学研究科・倫理創成プロジェクトは、京都精華大学・機能マンガ研究プロジェクトと共に、「アスベストマンガプロジェクト」すなわちアスベスト問題のマンガ化に取り組み、2012 年 7 月 1 日に『石の綿―マンガで読むアスベスト問題―』を出版した。報告者自身も深く関わった本プロジェクトは、次世代へのリスク伝達ということを目的として想定している。監訳者（松田毅・竹宮惠子）による「あとがき」に次の言がある。

> マンガは、我が国の文化として国際的にも認知されています。本書の目的は、マンガならではの問題提起・喚起力を活かし、アスベスト被害の歴史と現状を広く伝達し、歴史の事実と教訓として後世に継承することにあります。また、本書が、二〇一一年の東日本大震災以降、危惧される、震災瓦礫から飛散するアスベスト曝露を始め、アスベストによる健康被害を防止するための「リスクコミュニケーション」（環境教育、啓発活動）に活用されることを願ってやみません。本書を通して、あらためてアスベストによる健康被害の深刻さと問題の普遍性を示し、市民・青少年の関心を高め、リスクと向き合うことのできる市民社会の形成に寄与したいと考えます。（松田毅・竹宮惠子監修 2012, p.250. 強調は本林）

アスベストマンガプロジェクトは次世代にリスクを伝えるという点を主眼に置いている。すなわち未来世代への想像力を働かせるということが本プロジェクトのポイントとなっているのである。

将来起こり得る痛みを想うこと、次世代にアスベストのリスクを継承すること、こうした縦軸のリスクコミュニケーションがアスベスト問題においては求められる。現在、苦し

んでいる人を想うとともに、将来、苦しみ得る人を想う必要がある。

痛みと連帯

これまで、痛みを想像することの必要性について述べてきたが、最後に痛みという観点から考えられる可能性について考えたい。

2011 年度の倫理創成論演習では、各チーム 3〜4 人が「患者と家族の会」へのインタビューを踏まえた上で発表した。李明哲（神戸大学人文学研究科）をリーダーとするチームは、発表の末尾にて、「アスベスト被害による連帯意識の積極的解釈」（チーム Lee のスライド原稿より引用）に言及した。以下、チーム Lee の発表スライドより引用する。「アスベスト被害による〈連帯意識〉はアスベスト被害の救済と予防という求心点をもって、被害者とその家族周辺の人々のあいだで共有されている」（チーム Lee のスライド原稿より引用、強調はチーム Lee）。チーム Lee は、「アスベスト被害による連帯意識」の「求心点」に「アスベスト被害の救済と予防」を見ている。本報告は、こうした当事者同士の連帯意識の背後に一つの心的原理が働いていることを指摘したい。すなわち「痛み」という心的原理である。痛みが当事者同士の連帯を可能にしていると考えられないだろうか(3)[74]。

2012 年度倫理創成論演習では、「クボタショックから 7 年　アスベスト被害の救済と根絶をめざす尼崎集会」（6 月 30 日、小田公民館にて）に参加した。また、私自身アスベスト被害者の方への聞き取り調査にも関わってきたが、こうしたシンポジウムや聞き取り調査の際に、支援団体や被害者とその家族によって作られた会が、いかにその人の精神的な支えとなっているかを実感することが多かった。被害者の方がそれぞれ抱える痛みは別様であるけれども、アスベストによって引き起こされた痛みを共有しているからこそ、言い換えれば、痛みを通じた連帯がなされているからこそ、支援団体や被害者による会が精神的な支えとなり得ると思われる。

終わりに

ここまで、痛みと想像力というテーマに関して多面的に考察してきた。痛みは、それ自体としては避けられるべきものではあるがしかし、あるいはだからこそ、本報告では、痛みを介して、連帯しあう可能性や痛みを想うことの必要性についても言及してきた。

今回の東北への在外調査では、被災者の方へインタビュー調査を行ったわけではない。

---

[74]ヴァイツゼッカー研究会（PATHOSOPHIA）にてヴァイツゼッカーの「痛み」という論文を読んだことが、痛みに関する本報告を書く上で大きな原動力となった。特に、私が「痛みによる連帯」を着想するに至った背景として、後述するチーム Lee の発表スライドに加え、ヴァイツゼッカーが主張するところの原光景、すなわち「幼き姉」が「幼き弟」の「彼にとって痛みあるところに触れようとする」「原光景 Urszene」（Viktor von Weizsäcker, 1987, p.27.）を指摘したい。

それゆえ、震災や津波による痛みを訴える言葉を直接聞いたわけではない。しかし、被災跡地を前にして、参加者全員がたしかに痛みに触れていた、痛みを想像していた。

日和山公園から周辺被災地を一望したとき、何人かの人がそこで撮影した写真と、現実の目の前にある風景が一致しないと発言していた。事実、私もデジカメの記録写真と現実の眼前の風景のあいだのギャップを強く感じた。このことは、アスベストや震災といった問題を考える上で、現場に行くという意味でのフィールドワークを実施することの重要性を示唆する一つの証左であるように思われる。そしてその限りで、今回石巻での調査に参加したことは意義のとても大きいものであったと確信している。

本報告は、被災者支援において、将来起こり得る痛みが想定される必要があるという点を強調した。すなわち、将来の痛みを想定した支援活動が展開される必要がある。『石の綿』の「アスベスト・ポリティクス」には、さしがや保育園のアスベスト曝露についてのインタビューの要約が記されている。「〔子供が〕死ぬとしても三十年後だ」と「区長」から「目の前で言われた」親は、「うちの子は一歳ですから、そのとき三十一歳ですよ」、「そういう想像力が政治家の人にはないんです」と述べている（松田毅・竹宮惠子監修, 2012, p.120. 強調及び〔　〕内は本林）。震災・津波・アスベスト、それぞれの被害をめぐる状況は相互に関連しており、また同時に様々であるが故、震災・津波・アスベストによる被害の支援のあるべき姿を一様に示すことができないことは言うまでもない。しかし、将来生じ得る悲劇への想像力をもって支援に取り組むこと、このことは一貫して被災者支援の文脈にて求められているように思われる。

参考文献

特定非営利活動法人・東京労働安全衛生センター「東日本大震災後の被災地におけるアスベストの状況――石巻アスベスト・プロジェクト報告書」、特定非営利活動法人・東京労働安全衛生センター、2012 年。

広瀬弘忠『静かな時限爆弾――アスベスト災害』、新曜社、1985 年。

松田毅・竹宮惠子（監修）、神戸大学人文学研究科倫理創成プロジェクト・京都精華大学機能マンガ研究プロジェクト（制作）『石の綿―マンガで読むアスベスト問題―』、かもがわ出版、2012 年。

宮地尚子『環状島＝トラウマの地政学』、みすず書房、2007 年。

Viktor von Weizsäcker, “Die Schmerzen”, *Gesammelte Schriften Bd.5 Der Arzt und der Kranke: Stücke einer medizinischen Anthropologie*, Suhrkamp Verlag, 1987(1 Auful.), p.27-47.

吉村昭『三陸海岸大津波』、文藝春秋、2004 年。

付記 本報告を書くにあたって、2011 年度倫理創成論演習のチーム Lee の発表スライドを引用・参照しました。